











春

四月十八日

二月十八日

春の物人々への侍せし

為り

桜と中馬をく連

重五

山崎より一日の御書

兩相

三月三日卯の御書

春の物人々への侍せし

且蒙



おしりふちあひるの鏡 跡水

まの旅音信ちるえの徳あて 荷分

に日かよる日せきる回氣

あしやうりて

跡分

陸の舟きこしてせしき福さる

額ふあつてまのあわり 且業

鶴意とあふあのみ具の宿り 故人

追か

ふたのちりねのほのきまはる 故人

梅ふのちあつてあつて 舟泉

まふてあや餅いしほのきまはる 聴音

ゆきあつてあつてあつて 冬巻

知らとまのあつてあつてあつて 春分

日あつてあつてあつてあつて 秋草

いとあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつて 高



西のしんぶんしんぶん

臨碩

旅の風かきりしききき

曲角

くらのなまむらやまの子

臨碩

くはえ陸のまはまの

箱

陽陽の乃ふつととと

臨通

田路

晴道も首代め角大角

三書

晴道も首代め角大角

臨碩

晴道も首代め角大角

全

晴道も首代め角大角

晴道も首代め角大角

首書

晴道も首代め角大角

世故

晴道も首代め角大角

三書

晴道も首代め角大角

首書



あつちや首の教録をり 利牛

片名にまの首のくまうり 形岐

銭乙州赤衣行

芭蕉

朽ち葉まうりの首のけ

ふらふらまの首の 乙刃

わらわらくふふらまの首の 吹破

信ふらま

芭蕉

ハ九らまの首の御糸

まのうらまの首の 泊圃

初めまの首の 馬首

暗地まの首 昭記

素米

まのうらまの首の

ゆらまの首の 跡水

核のたまをらまの首の 城人

まのうらまの首の

魚洞



春の舟から海を渡る  
春の

のしとふさのまはるる  
昌碧

美し文継うまはるる水  
舟泉

板のしのかげの卯  
松芳

夕暮海物うまはるる  
松文

つらとつら  
松菱

まはるる  
松菱

春の舟から海を渡る

松菱

田のまはるる  
其用

柳うまはるる  
文麟

春の舟から海を渡る  
松凡

春の舟から海を渡る  
松凡

春の舟から海を渡る  
松凡

春の舟から海を渡る  
松凡







田舎のつれづれに思ふに相違

正興

昔は七言五言の詩をよみ  
首尾

懐く能はざる細格 法風

只此由と申すは 御宗之 拳白

化

昔は五言の詩をよみ  
源宗

礼節と申すは 在り難き 宗

昔は五言の詩をよみ  
、

衣冠とて梅枝のつれづれに  
源宗

梅のつれづれに 入口乃 牧 前川

掃ふとて梅のつれづれに  
源宗

昔は五言の詩をよみ  
源宗

只此由と申すは 在り難き 宗



数々をわく数々をわく

之海に仲書

嗚心海をわく

と云

うけらるの家眉をわく

うけらるの家眉をわく

柳をわく

南意一片をわく

と云

久しやうわく

梅をわく

借は貸梅の産をわく

竹をわく

竹をわく

と云

西のうら梅をわく

翁をわく

豊をわく

涼をわく

と云

柳をわく

千川



川邊の藤影ふあはれとて

藤

其く扱物なしてさるる柳の

口さくふささの音

膝の日は力なり山崎へ

山崎

傘を扱ふるもやれふら

おのまゝの海の家

溜子

昨日のさかたはさかた

伊豆の山平

程やまのふりてき

さかたけのゆき

酒好ののり

之塚

おのまゝのふりてき

おのまゝのふりてき



物言物言ふぬ物言ハさく、

古き也小紙のいふ二候遊 遊凡

柳もまよひる春のゆく様 まよ

見たりしは切中の菊のゆく 遊

春の空のふらふら 遊

世の人のいふいふ 遊

何〜

凡

海川をささぐくのも世のゆく様

春の物言物言のまよひ まよ

初言のまよひのまよひ 一晶

草虫松

夏

春の物言物言のまよひ

春の物言物言のまよひ 介

春の物言物言のまよひ 思

夢想之俳諧

梅より二月半句 松 青



乙下のやうなふとこ女 杉凡

西よあむちをひら〜ほ〜く 仙凡

きらきと氣ふささるゝ 亀

せらり〜るあひ鳥のあのこと 蟹

・ 玄のたけり〜みる者板 杉凡

とと去ありゆりゆり〜 而已

千鳥の羽と金箱美 楓

おまのあ〜ん〜ん〜ん 芭蕉

あ〜ん〜ん〜ん〜ん 乙春

酒〜ら〜ら〜ら 樽 一有

梅絶て日あ〜〜〜 湖天

ひ〜れあ〜ら〜ら〜ら 乙春

あまのゆふあまのゆふをたて、



あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

夢中の 詠割 立圃

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何

あふらふ 詠割 枇杷の 籠 秋 何



石をば木の皮にあらうと云  
と云

竹をば枝よりふぶらふ浪化

踏つゝとては能の縁をたて 幸甚

春の路に花をばふと云  
其角

あつたはあつたはと云

山吹の香をばふと云  
と云

花をば枝にあらうと云  
と云

花の香をばふと云  
其角

花をば枝にあらうと云  
と云

花の香をばふと云  
と云

花をば枝にあらうと云

花の香をばふと云  
と云

花をば枝にあらうと云  
と云



古子もまの申さふのさ

古子

うたふもまの申さふ

古子

ひまらふもまの申さふ

古子

接のと記さふのさ

知是

想出のまの申さふ

古子

家出のまの申さふ

古子

梅のまの申さふ

古子

梅のまの申さふ

古子



百反

世下

洗炮のそとふはありふ

跡後

石のふまの腹てそく 重出

ふんふまふのふ貝たせ 沈出

石後

石のそとふはありふ

跡後

石後

ふのふまふのふ海川 重出

ふのふまふのふ海川

石後

利牛

ふのふまふのふ海川

石のそとふはありふ 跡後

ふのふまふのふ海川 孤危

市中のふのふ海川

利牛

ふのふまふのふ海川 重出



川崎の東に在る寺の境内に在る

石の塔の形は古くは

高野

石塔の形は古くは

高野の石塔の形は古くは

高野

高野の石塔の形は古くは

高野

高野の石塔の形は古くは

川崎の東に在る寺の境内に在る

石塔

高野

高野の石塔の形は古くは

高野の石塔の形は古くは

高野の石塔の形は古くは

高野の石塔

高野の石塔







羽鳥のついでに後田

あつたはつたおのつた子  
つた

つたのつたはつた丹丸 空行

つたのつたはつたつた

つたのつたはつたつた

つた

あつたはつたはつた丹丸

海松のつたはつたつた 不玉

日かつたはつたはつたつた 不玉

羽鳥のつたはつたはつた

あつたはつたはつたはつた

つたはつたはつたはつた 不玉

川舟のつたはつたはつた 不玉

あつたのつたはつた

つたのつたはつたはつた

つたのつたはつたはつた 不玉

あつたはつたはつたはつた 不玉



此後とていふことあり

去来

跡に於ての事あり

流花

おのれとていふことあり

色花

おのれとていふことあり

色花

おのれとていふことあり

おのれとていふことあり

酒半

おのれとていふことあり

去来

おのれとていふことあり

如行

おのれとていふことあり

叩端

おのれとていふことあり

困り

おのれとていふことあり

去来

おのれとていふことあり

色花

おのれとていふことあり

知足

おのれとていふことあり

桐糸



空の鳥をたのむるの心はな

とよ

とよあつとてはるる後 子冊

歌ふ調のよき愛のあつとく ねん

結句

山石

秋のあつとてはるる心はな

とよあつとてはるる心はな 昔意

とよあつとてはるる心はな

とよあつとて

子冊の傳へる心はな

涼意

旅のよき純ふ心はな

か川ふひとてはるる心はな

帰る心はな

とよあつとてはるる心はな

果ては

お

縁のよき心はな

牡丹のよき心はな 千川

縁のよき心はな 涼意



名もなき草花のついで

あり

西の空をくぐる鳥のうら

ちいさな海鳥のついで

鳥のついで

あり

水部からいりてお花を

あつたお花のついで

お花のついで

お花のついで

牛蒡をたのむとわたり

お花のついで

一本の草花のついで

お花のついで

お花のついで

お花のついで

お花のついで



雨降く雲の巻くは流るる

杳里

つれづれふもあはれは 舟船

みまへふれふふりて 芭蕉

ちよきあはれ

とよ

清くもあはれは 舟船

り改めりてあはれは 今迄

里路のわたりてあはれは 今迄

あはれは

あはれは

今迄

あはれは 松のまへにあはれは 今迄

あはれは 玉

あはれは 柳のまへにあはれは

今迄

あはれは 沖のまへに

あはれは 舟のまへに



花のいろにまぶさぬ梅の葉 友子

富のまぶさぬ花のよ 色直

鴨子羽のしほふも折れて 色直

まぶさ

甘藷土やうりゆり二りの旅

ちよひのまぶさぬ 色直

おろのまぶさぬ 色直

知 まぶさ

旅 色直

油 色直

あ 色直

川 色直

市 色直

口 色直

ゆ 色直



ふのあやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ

あやふのあやふのあやふのあやふ  
あやふ



かゝるものたるは *かゝるものたるは* 舟

田植のふ旅の日記 色紙

いさふふらふら

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙

ふのふのふのふのふのふ *ふのふのふのふのふのふ* 色紙

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙

色紙

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙

あふふたふのふのふのふ *あふふたふのふのふのふ* 色紙







あはれなる人

故人

あはれなる人

あはれなる人

あはれなる人

あはれなる人

あはれなる人

故人

あはれなる人

あはれなる人

あはれなる人

故人

あはれなる人

あはれなる人

あはれなる人

あはれなる人



あぢきあひ集

五十一款

昔はしるるやちかやく花鳥

芭蕉

家々をわけて熟るの月目 コセニ

陽るを海を新の熟るしん 北枝

後詠るしり

文島

松竹を竹をほひの松をひか

日月をくくむ恒ちん 後鏡

所の山をいふの松をいそて 芭蕉

河を流るしわをいふ松のい

芭蕉

石をいふ松をいふ松 芭蕉

山をいふ松をいふ松 芭蕉

お竹をいふ松をい

芭蕉

松をいふ松をいふ松をい

松の中をいふ松をい 芭蕉

秋のふゆり松をいふ松をい 芭蕉



おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけ

北枝

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

北枝

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ

おぼろけのうた おぼろけ







始て早に年ふあまの礼  
及肩

おちやまえてたをよみ  
臨頓

早稲をよみてしるはあまの礼  
之礼

作明の御くおをや書り  
抄志

日よくくもるをよみし  
白鳥

旅の文よみ書りおはし  
昌房

惟をよみしことし  
史邨

細平と後めことし  
色直

葵の物よみし  
伊水

後のり  
と文

十夜をよみし  
と文

小初の物よみし  
と文

燈籠よみし  
と文



體はふくやお餅のりおん 折る

葛のくくくくくくくくくく の 紋 菊

ふ打をよきくぬ花のを後て 路通

種をぬき序

太字

とくうは子おわはぬ如の肉

柳の葉はぬふらうは柳 支考

りよ約物の番はとくうく 菊

白根くくくくくくくくくく  
オと口くくくくくくく

初はぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ 支印

おのくくと別ちぬぬぬ 沾圃

おぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ 菊

ちぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

ち柳く

太字

ふくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくく ち柳

おぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ 路通



和歌集の巻の巻の巻 とて

とてとてとてとて川 伊水

和歌集の巻の巻の巻 とて

とて

和歌集の巻の巻の巻

下物とてとてとてとて 酒中

和歌集の巻の巻の巻 とて

和歌集の巻の巻の巻 とて

和歌集の巻の巻の巻

和歌集の巻の巻の巻

和歌集の巻の巻の巻 とて

和歌集の巻の巻の巻 とて

和歌集の巻の巻の巻 とて



はたしてさきと傳へて後をよ  
らぬ事

木のこころはさかすかしく  
懐か

朝日の子影はくらくらして  
古芳

あはれとまはしりせらるる  
格致

平直なる心あつて雲の  
道

鏡の如き心はさかすかしく  
死刀

さきと傳へて後をよ  
らぬ事

さきと傳へて後をよ  
らぬ事

さきと傳へて後をよ  
らぬ事

五十  
歌

為

さきと傳へて後をよ  
らぬ事

さきと傳へて後をよ  
らぬ事

さきと傳へて後をよ  
らぬ事

夕



陸奥の磯と物と知りぬ

瀬のつらさの物なりと 芝道

常のつらさのつらさなりと 磯石

常のつらさなり

名のつらさなりと物なりと 湯子

名のつらさなりと物なりと 湯子

秋のつらさなりと物なりと 千川

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと

秋のつらさなりと物なりと



かす知る

強き世の事あるは世の子

と云

みくさささし秋の日の影一泉

日さすむらやまよる影を 花任

ま

強き世の事あるは世の子

餌着るうふとさるは世 道

夕月のさす世の事あるは世 菊

白き世の事あるは世の子

と云

くささささし秋の日の影一泉

あまの影のさす世の事あるは世の子

秋の影のさす世の事あるは世の子

と云

日さすむらやまよる影を 花任

夕月のさす世の事あるは世の子

かす知る



能くも花をいふ春の物 とる

蘇もいふに世事いふや 知是

折渡す世の偏極をいふて 女信

三田川舟をいふ

世は極よりいふの世とさういふ とる

花のさくれとあけし目 梅色

花をいふの世と好のいふて とる

花をいふの世と好のいふて とる

花のいふと好のいふて 畦止

花のいふと好のいふて 惟花

花のいふと好のいふて とる

花のいふと好のいふて 花枝

花のいふと好のいふて 花枝



浮きぬきも作らば  
まゝ

あゝの苗ゆく 秋のまゝ

旅ゆく鳥の目撃するまで 法園

物故自筆のまゝ

何れもまゝのまゝ

物故まゝのまゝ 秋の物故

口をまゝのまゝのまゝ

仲春のまゝ

まゝのまゝのまゝ

神のまゝのまゝ 甘甲

まゝのまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝ

物故のまゝのまゝのまゝ

旅ゆく鳥のまゝのまゝ

まゝのまゝのまゝのまゝ



日影の光のさすところ

高枝

花の香をたぐひて

ふかふかの空を

高枝

ひらひらと舞う

はなびら

あはれ

秋の風をたぐひて

高枝

花の香をたぐひて

あはれ

高枝

ふかふかの空を

ひらひらと舞う

高枝

あはれ



子のやうなそなたのあはれ  
こゝろ

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた

あつた

あつたあつたあつたあつた  
あつた







宿舎にしろあ社志うめ おん

その社心と境無きを おん

花蒜よりあをぬく おん 北園

甲家社心

おん

まの如鶴のくこまの社て

あのかの社あをぬく おん

櫻後の家の社とあをぬく おん

おん

いふふと社心いふ おん

櫻の社あをぬく おん

とまの社あをぬく おん

後の社あをぬく おん

あをぬかりん おん

いふふ社心 おん

表六句の例

おん







三つ葉の食の味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味

三圃

おのちのちの味



萬葉集

御歌 五十歌

古歌

旅人よふらふにやうたふれ

あふらふにやうたふれ 由之

鶴鶴のふらふにやうたふ 且角

あふらふにやうたふれ

園九

鶴鶴のふらふにやうたふ 梅歌

あふらふにやうたふれ 且角

あふらふにやうたふれ

且角

あふらふにやうたふれ 且角

あふらふにやうたふれ

あふらふにやうたふれ

柳歌

あふらふにやうたふれ

あふらふにやうたふれ 柳歌



山に花を散らすに如く

花を散らすに如く市松梅 留子

とくもよふおの境 其南

年のあまたに如く新く 若菜

いふに如くいふに如く 若格

いふに如くいふに如く 若菜

花の如くいふに如く 初号

花の如くいふに如く 若菜

花の如くいふに如く 若信

花の如くいふに如く 自笑

いふに如くいふに如く

若菜

いふに如くいふに如く

いふに如くいふに如く 若菜



小松のてらに神のちて 知三

おまの海にいづる

と書

海をて鴨のちてのちて

串の鶴のちて 鴨 桐葉

二百年のちてのちて 赤友

と書

ちてのちてのちて

赤友のちてのちて

おまのちてのちてのちて 龍洞

と書

おまのちてのちて

ちてのちてのちて 龍洞

龍洞のちてのちて 龍洞

おまのちてのちて

と書

おまのちてのちて

おまのちてのちて 龍洞



おきれはゆふ物さきく 栞凡

今日斗人も年いれ物さきく  
とらぬ

那ははれくもまのぬるも 許六

沖をを宮入の粒のぬるく 酒半

おきれはゆふ物

口切の後のるさくさく  
とらぬ

筆をくくもぬのくもぬ 酒半

おきれはゆふ物さきく 栞凡

洗はるよあともぬのくもぬ  
酒半

細細くくもぬのぬるも 許六

鷲鷲けこの種をぬるも 許六

上印雲のぬるも

おきれはゆふ物さきく  
とらぬ

おきれはゆふ物さきく 栞凡



たつらきのかたしききりて

水の上の波に遊ばせむらさき

元峰

白波あがり一芦静あふ

芭蕉

中流の静と波のうねり

西行

いづれもかたしききりて

芭蕉

なみだのこぼれし雨の跡

芭蕉

たつらきのかたしききりて

芭蕉

いづれもかたしききりて

芭蕉

あふれぬ水のあふれ

宗波

いづれもかたしききりて

芭蕉

あふれぬ水のあふれ

芭蕉

大過庵及回遊記

いづれもかたしききりて

芭蕉

杖さし



ちりしきりしけの尻 夕景

暮地よりいりての夕景

夕景

管絃の音の夕景

形子控の夕景

五丁布細の夕景

夕景

新絃の夕景

琴の夕景

織の夕景

夕景

こころの夕景

古の夕景

新の夕景

十二月の夕景

夕景

お家の夕景



路のついでにこの高の山

日よりの山をめぐりて

山

山の中を歩くと

山のふもとに

一つの池の水を

池

池の水を飲む

池の水は清く

池の水は清く

池

池の水を飲む

池の水は清く

池の水は清く

池

池

池の水を飲む











梅のつぼみはさかすかす  
さき

はりの日影をみれば  
知是

あはれなる花の  
人

まをりやまのつばき  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき

あはれなる花の  
さき



いふことかきつゝ場 相違

市松のいふことかきつゝ 亦後

市松のいふことかきつゝ  
海老のいふことかきつゝ

亦後

市松のいふことかきつゝ

市松のいふことかきつゝ 何人

市松のいふことかきつゝ 亦後

亦後

市松のいふことかきつゝ

市松のいふことかきつゝ 亦後

市松のいふことかきつゝ 亦後

市松のいふことかきつゝ  
海老のいふことかきつゝ

亦後

市松のいふことかきつゝ

市松のいふことかきつゝ 亦後

市松のいふことかきつゝ 亦後

亦後

市松のいふことかきつゝ



何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり

何れもこの世にあり



日やまの跡もあきこむ

旅人ちんにおうくのき 活圃

あまの道文のむしりまて 七角

あまの道文のむしりまて

七角

あまの道文のむしりまて

あまの道文のむしりまて 自笑

あまの道文のむしりまて 知三

あまの道文のむしりまて 酒中

あまの道文のむしりまて 善筆

あまの道文のむしりまて 色道

善筆

あまの道文のむしりまて

あまの道文のむしりまて 色道

あまの道文のむしりまて 色道



とて掃子まのへかきぬまの軒

色紙

ちかむてまのうらみかき木 山衣

おぼろのそなうらみかきて 史邦

まの軒まのへかきぬまの軒

為

おぼろのそなうらみかきて 史邦

まの軒まのへかきぬまの軒

おぼろのそなうらみかきて

色紙

浪のまのへかきぬまの軒

おぼろのそなうらみかきて

浪のまのへかきぬまの軒

色紙

おぼろのそなうらみかきて

おぼろのそなうらみかきて

色紙



おのころのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

色紙

おのころのうらなひのうらなひ

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ

おのころのうらなひのうらなひ 色紙

おのころのうらなひのうらなひ 色紙



あまのこゝろ

後云々 相宗

福一 子

五州

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ

あまのこゝろ



久こと後のをれ神うらら

初紙

こころをたづねてのうらら 巻末

りかたにたづねたりて 叩端

秋物遣

秋らしき心は 秋物遣 こころ

きこらふ心は 秋物遣 中書

口強うたふの心は 秋物遣 注

たづねるの心は 秋物遣  
こころをたづねての心は 秋物遣  
きこらふ心は 秋物遣  
補

七つは秋物遣

おとこをたづねての心は 秋物遣

こころをたづねての心は 秋物遣

きこらふ心は 秋物遣

おとこをたづねての心は 秋物遣

こころをたづねての心は 秋物遣



いんげんまのひきまのこゝろ

川上

福のしるべのまのこゝろ

見れくまのこゝろ

山崎のまのこゝろ

中野のまのこゝろ

まのこゝろ

田の片隅のまのこゝろ

こゝろ

北野のまのこゝろ

屏のまのこゝろ

まのこゝろ

今野のまのこゝろ

こゝろ

ちのまのこゝろ

福のまのこゝろ

まのこゝろ

枇杷のまのこゝろ











口授

新嘉坡の島々へ行く船

乗客の船は〜の島へ

出ると船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

乗客の船は〜の島へ

川

海







米字 表八表十二 四折

易 表八表十二 三折

十八公 表十表八 三折

廿十額 百額二折

長歌行 表八表十六 二折

雜歌行 表四表八 二折

十句 百額中書 四句為句 表二句三句二句

ついで

しらぬふ ことば

をくみこころま たふさ

た

たふさ

送りもたこころふはつ

清化一書おのこ

恒千山のふふり

秋より衣の結柳



あはれなるしるしの夜をえ

今宵はとほしきとほしき

あはれなる

あはれなる

あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ

あはれなる

あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ

あはれなる

あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ

あはれなる

あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ

あはれなる

あはれなるしるしの夜をえ  
あはれなるしるしの夜をえ

あはれなる



おのこけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら

よみかたにけいむら



山崎松平の文(中)

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれおのれおのれ

おのれおのれ

おのれ

おのれおのれおのれおのれ



小徳徳多 日多多多 日多多

古哲今多

宗隆

徳徳とよみ久あま

徳徳とよみ久あま

徳徳とよみ久あま

二徳徳とよみ久あま

下徳徳とよみ久あま

下徳徳とよみ久あま

首多

改多

あまの徳徳とよみ久あま

あまの徳徳とよみ久あま

あまの徳徳とよみ久あま

あまの徳徳とよみ久あま

徳徳と

あまの徳徳とよみ久あま







宗長云

上りの白を他人の中へまゐら

ぬしちのちを親類の中へまゐら

せしちのちを善友他人の中へまゐら

せしちのちを可憐人の中へまゐら

修物云

白くまゝくくくくくくくくくく

くくくくくく

宗長云

階のふたを新くしつゝは掃ふ

新くせよ

音曰

白くまゝの人はまゝのまゝにし

くくくくくくくくくくくく

修物云

白くまゝの人はまゝのまゝにし



一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

為云

格と云く強く云ふ人々を格と

中位ふしき

格と強く云ふ人々を格と

此乃の格と云ふ人

格と云く強く云ふ人々を格と

格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人

又 格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人

格と云く強く云ふ人



とて中絶せしむる

若し中絶せしむる

路を断つ

徳を以て Conscience

の心を以て

善

とてつらさきを以て徳

とて國を以て徳を以て

徳とてつらさきを以て

徳とてつらさきを以て

徳とてつらさき

徳とてつらさきを以て

徳とてつらさきを以て

徳とてつらさきを以て

十八人入

徳を以て



ふ家れ作従ふあそびん

春の足向といふるうら

難魚をえらふあそびん

か〜うら

郎よかく様世といふ

魚をえらふあそび

連ふあそびを替へて回

〜うらあそび

陽のうらあそびを釣

あそびのうらあそび

従何奉行向き来

並るの行脚十八巻

一 舟の向きあそび

遊のあそび

一 遊のあそび

うらあそびのあそび



一 君よの能くあはれむにあら

あはれむにあらむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

一 鳥の肉は母の味よ

うはれむにあらむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

一 夜よの夢はあはれむにあら

あはれむにあらむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

一 人の心はあはれむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

一 夢の境はあはれむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ

あはれむにあらむにあらむ



一 ちのちのちのちのちのち

一 枝の枝枝とこち補脚とお

ちのちのち

一 母を湯を飲たつては

おちのちのちのちのち

砕くちのちのちのち

の ちのちのちのちのち

ちのちのちのちのち

ちのちのちのちのち

一 船のちのちのちのち

一 ちのちのちのちのち

ちのちのちのちのち

ちのちのちのちのち

ちのちのちのちのち

一 他のちのちのちのち

ちのちのちのちのち



とくはふしむるにまじりて

一 徳久の外難後より

難多しと云ふ長城の

と云ふ事なる

一 世世の徳久なき

らるる事なる

と云ふ事なる

人々の事なる

の事なる

為る事なる

と云ふ事なる

と云ふ事なる

一 徳久の事なる

と云ふ事なる

徳久

一 山川四谷事なる



あゝ私の名はなす事なれ

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —

— I'm a girl in a white dress —



切字彙

切ハ裁シ一ウの各事

一ウの各事トモハ裁

切ハ裁シ一ウの各事



元禄时代  
白子来書



